



新橋色



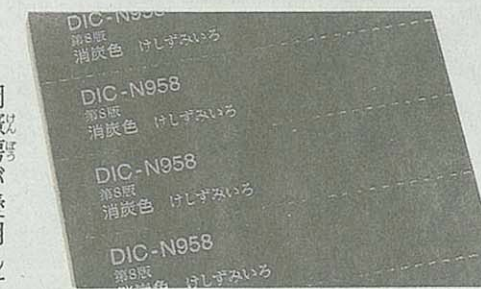
江戸紫

青みを帯びた紫色で、江戸で染められた紫色を意味。京都の染色技術に対抗するため、色名に「江戸」を付けた



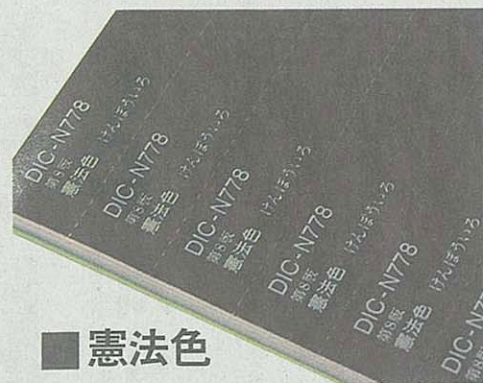
萌葱色

萌え出る葱(ねぎ)の芽のような緑色。平安時代から用いられた色名で、黒、柿色とともに、歌舞伎の定式幕の色の1つ



消炭色

黒色に近い灰色。シックな色合いがインテリア雑貨などに重宝されている



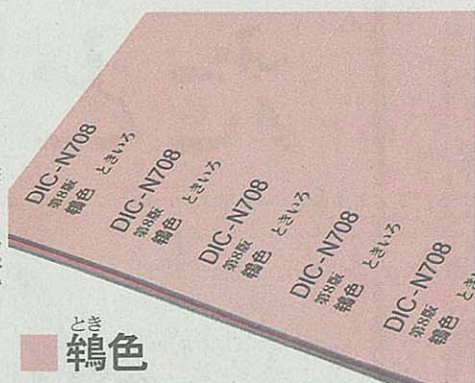
憲法色

春の菜の花色、夏の若竹色。中央区日本橋のインキメーカー「DICグラフィックス」には、日本で古来伝わる伝統的な色をまとめた「色見本帳」がある。最近では、地域活性化にも一役買っているらしい。奥深い色の世界へようこそ。

いろいろ色



伝統色を説明する西垣雅史企画開発部長(左)と営業部の西野悠(はるか)さん(右)＝中央区日本橋のDICグラフィックスで



鶺鴒色

少し黄みがかった淡くやさしい桃色。特別天然記念物のトキが翼を広げた際の下面がこの色。万葉集にもこの色名が出ている



利休鼠

くすんだイメージの緑色。茶人の利休が好んだと伝えられることから、この名が付いた



深緋

紫みの暗い赤色。和菓子の紅白まんじゅうの「紅」の色合いに使われるなど、日本人が古来よく目にしている

「新橋色、鶺鴒色、消炭色、憲法色…。一体、どんな色か、想像つきますか」。企画開発部長の西垣雅史さん(55)が、楽しそうに問いかけてきた。一概に「赤」といっても、茶色があった赤や、クリーム調が強い赤など微妙に違う。一九〇八年創業のDICグル

ープが、カラーガイド「日本の伝統色」を作成したのは一九七八年のこと。古代色の再現を図り、色の名前の由来を解説した色見本帳だ。自然や伝統文化などに基づいて名付けられた千百余りの色を、日本色彩研究所(さいたま市)の協力を得て、三百色に整理

した。色には一つ一つ番号も振った。ファッションやインテリア業界で、数字は「その色」を示す際の「色の公用語」として定着している。「色にはそれぞれ、ストーリーがあるんです」と、西垣さんは力を込める。例えば、聞き慣れない「新橋色」は、突き抜けるような明るい水

地域活性に一役

色。江戸期の町人の着物は草木で染めた藍色が主流だったが、明治になり海外から日本の染色技術では出せない水色が輸入された。新橋地域の芸妓らが、当時の最先端ファッションの色合いとしてこの色

を流行させた。一方、「憲法色」はシックな黒色。実は国の憲法とは関係ない。染色家で剣術士の吉

は、「東京の伝統色」は西垣さんは「土地に根差す衣や食、建築、工芸、芸能、祭りなどを基に地域の伝統色は作られる。東京は素材があり過ぎて、まとめきれない」と苦笑いする。二〇二〇年東京五輪・パラリンピックを控え、東京には外国人も多く訪れる。「わが街を、色を通して見直す絶好の機会。色の面から地域貢献していきたい」。真っさらなキャンバスに、東京の未来色を描く試みはこれからだ。